写真提供：アトリエ艸舎

くらしかた・すまいかた
Vol.25

「外の間」のある暮らし

自然に寄り添う、住まいのかたち

福岡県福岡市は、日本海に面した土地柄、夏は高温多湿で雨が多く、
冬は曇りがちで北からの季節風が強く吹きます。
この寒暖差の大きい風土にあった住まいのかたちとして、
「外の間」と呼ばれる空間を取り入れた家づくりを提案しているのが
アトリエ艸舎の鈴木達郎さん・美奈さんご夫妻です。
今回はお二人の設計した「外の間」のある住まいと、
そこに暮らす家族のくらしかた・すまいかたを伺いました。

取材・編集：㈱地球工作所 Earth Planning & Work.inc
取材協力：鈴木達郎さん・美奈さん（アトリエ艸舎）

「外の間」が生まれるまで

編集部：鈴木さんたちアトリエ艸舎が手がける住宅の大きな特徴として「外の間（そとのま）」があげられますが、まずはこの「外の間」の成り立ちについて教えてください。
美奈さん：「外の間」は、自分たちの住まい兼アトリエを私の実家のガレージの上に構えたことから始まりました。夫婦二人で設計事務所を立ち上げたのが 1996 年。福岡に移住して数年経ち、仕事が軌道に乗るうちに元あったスペースだけでは手狭になり、打合せスペースとして家の外側にテラスを設けて、半屋外の空間を使うようになったんです。屋根がかかっているので雨の日も使うことができる空間です（P 1）。
鈴木さん：2 階にあるので高い木の緑も近いですし、室内にいるより季節や時間の変化がより身近に感じられるような気がしていました。
美奈さん：そのうち打合せでアトリエを訪れるお施主さんから、「この空間は気持ちいいね。」「我が家にもこういう空間が欲しい。」といった要望をいただくようになり、我が家だけではなく、様々なかたちの「外の間」が生まれていきました。
鈴木さん：もともと私たちは民家型工法を得意とする設計事務所にいて、住む人がより自然と寄り添えるような、内と外があいまいな空間が好きだったことも影響していると思います。
美奈さん：私はアントニン・レーモンドが設計した「門司ゴルフ倶楽部のクラブハウス」が好きなんです。軒の深いテラス席に座っていると、建物の中にいながら緑や風の流れを感じることができて、内と外があいまいな空間を体感できるんです。

内と外をつなぐ「住まいのへそ」

鈴木さん：私たちが設計してきた家の多くは福岡県北部にあり、1 年を通して温暖な気候なので、春は 3 月から冬は 12 月まで外部を取り込んだ暮らしが可能です。温暖といっても、日本海側気候の影響を受けているので、冬本番になれば雪が降ることもありますが、そんな自然の移ろいをダイレクトに感じることができるのも、この「外の間」の良さだと感じています。
編集部：同じ「外の間」でも、家によって形が違うのでしょうか。
美奈さん：「外の間」は基本的に壁がないものが多いのですが、共通しているのは、そこがすまいの一部であり、住まいの核というかへそのようなものだと言うことです。１つの空間ですが、時には玄関に、時には家族がくつろぐリビングに、近所の人が気軽に立ち寄る縁側のようにもなったり、子どもたちの遊び場になったり、いろんな使い方ができます。
鈴木さん：その暮らしぶりの多様さや住まいに関わるお施主さんたちの真摯さには、いつも驚かされています。家は工事が完了した時点が完成ではなく、スタート地点。そこに暮らす人が生活しながら、どんどん良い家になっていくんだと思います。

写真提供：アトリエ艸舎

1. 庭の木立を抜けた風が「外の間」を通っていく。心地よい風が流れ、長い庇によって影になった「外の間」には夏でも人が集う。2. 軒の内側に設けられた「風の入口」。ここから空気を取り込み、屋根に設けた出口を目指して常に動く空気層を作っている。3.「外の間」は玄関、子どもの遊び場、客人との交流の場、渡り廊下、通り土間といった多様な使い方をしている。4. 夏の西日を避けるための日よけは主自ら製作したもの。5. この家の主は彫刻家。製作に使って残った材は家の薪ストーブの燃料として使われる。6. 宗像の家からは山が見える。自然との近さも魅力のひとつ。7. 外の間に置かれた水鉢。中では気持ちよさそうにメダカが泳いでいた。8. 暮らし始めて数年経ち、庭木も大きくなってきた。木陰の下にバーベキューもできる手製のカマドがあり、外に向かった暮らしを楽しんでいる様子が伺える。

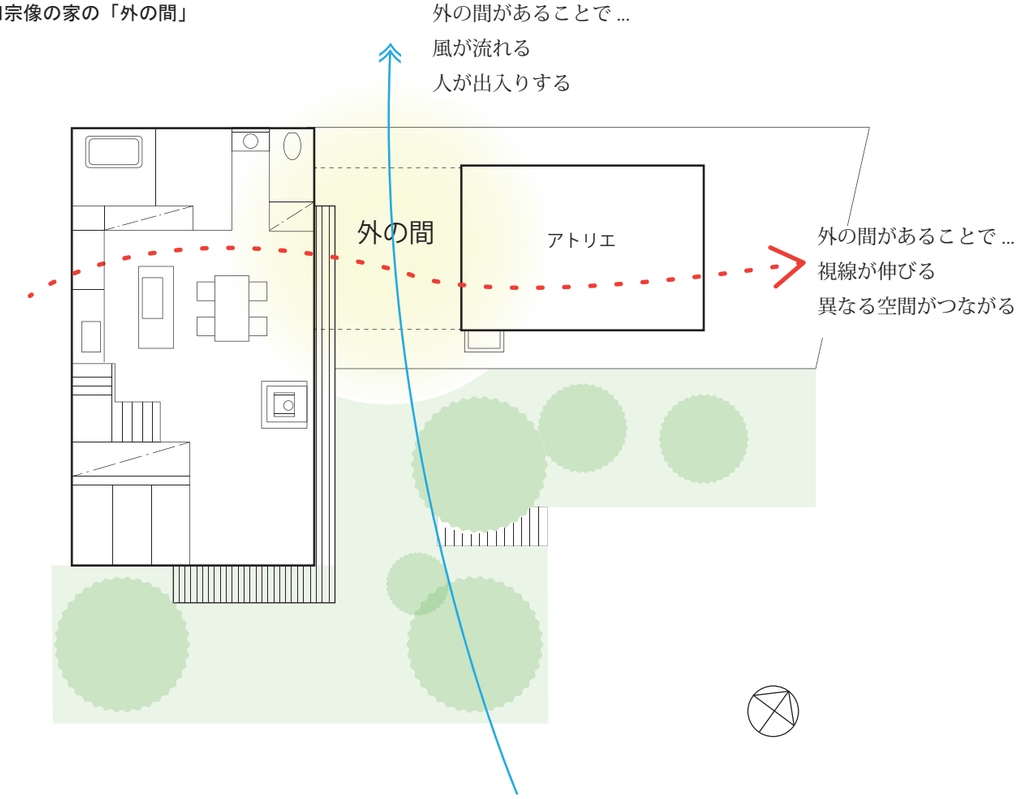
外に開かれた「外の間」～宗像の家～

鈴木さん：この家の主は彫刻家で、ここも「外の間」を持つ住宅として私たちが設計させていただきました。
この家の「外の間」は、居住空間と彫刻家であるお施主さんのアトリエをつなぐ間に配置しました。玄関を兼ねているので一日中人が行き来する場所です。子どもたちの遊び場としてブランコが付けてあったり、来客時には靴を履いたままお茶や食事を楽しめるようにテーブルと椅子が備えてあったり、いろんな使い方をされています。
この「外の間」の面白いところは、生活する場とモノを作る場の間に、人だけでなく、風や光などの自然をそのまま呼び込む力があることです。
編集部：今までの「外の間」とは違うのでしょうか？
鈴木さん：違うというか、宗像の家の「外の間」を作ることで、私たちがそれまで無意識に作ってきたこの穴のあいた空間を、始めて「外に開かれた空間」だと認識することができたんです。
美奈さん：この家の「外の間」がこれ以降のスタンダードになりました。それぐらい私たちにとって大きな意味を持った家です。

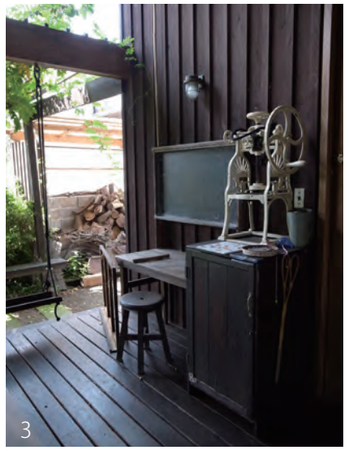
風を利用して、室内の温熱環境を整える

編集部：軒の深さが印象的ですね。
鈴木さん：夏の強い日差しを防ぐために必要な長さをとっています。冬は太陽高度が下がり夏よりも奥まで陽が差し込むので、冬でも太陽の暖かさを感じながらすごせます。軒の長さもいろいろ試行錯誤してきましたが、だいたい 1.2 m位の長さが標準になりました。
美奈さん：この軒先には溝があって、ここから取り入れた空気は屋根に設けた出口に向かって流れていきます。同じように外壁の下端にも空気の入口を設け、屋根の出口に向かって流れる空気層を外壁の中にも作っています。
鈴木さん：暖かい空気は下から上に移動する性質をもっています。この性質を利用し、家の外壁と内壁の間に常に流れる空気の層を設けることで、結露の防止につながっています。さらに断熱材を併用しているので、家の内外の気温差を少なくできるんです。
編集部：風を動かすために換気扇等の動力は使われていないのでしょうか？
鈴木さん：そうですね。そういった動的な設備は入れていません。建築的な工夫だけでも、自然の力を活かして、夏涼しく、冬あたたかなすまいを作ること、そして高温多湿な環境に対応することは可能なんです。

■宗像の家の「外の間」



写真提供：アトリエ艸舎



1. 家の壁を覆っているジャスミン。10 年位経って、壁一面を覆うほどに成長した。2.1 階の「外の間」の中心には座卓が置かれ、ここで食事を楽しんだり、子どもたちが遊んだりしている。奥にある藤棚やブランコも全てご夫妻の手作り。3.1 階の「外の間」には古い黒板、机と椅子、カキ氷器などが置かれている。この家のあちこちでリユース (Reuse) によって、たくさんのモノの命が吹き返している様が見られる。4. 庭の池も自分たちで掘って作ったもの。5.2 階の外の間からの眺め。手すりは 30cm と低めだが、子どもたちは用心するので転落の心配はなかったそう。6.2 階から庭と畑を望む。緑が成長し、庭に緑陰を落としている。7. カフェのカウンターにはフウウセンカズラの芽が。8. 敷地内に建てられたカフェのランチ。奥さまが丁寧に作ったものばかりで、庭の畑で採れたものもメニューにのぼることもあるそう。

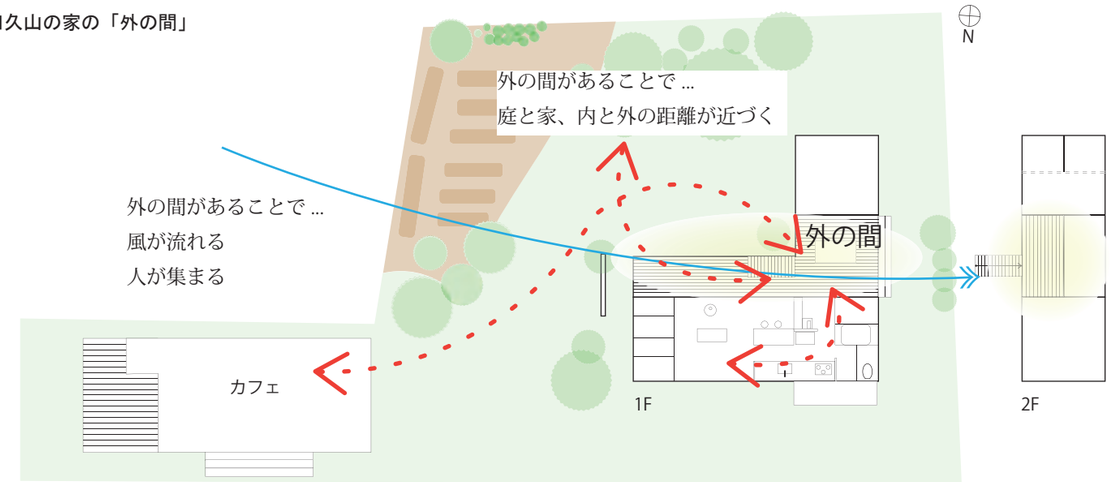
立体的な「外の間」～久山の家～

鈴木さん：この家の「外の間」は南側の庭に向かって東西に長く開かれています。特徴的なのは、「外の間」を立体的にとった点です。
「外の間」の中に階段があり、この階段を通じて 1 階と 2 階の「外の間」がつながっています。1 階は工房と台所の中心に座卓を置き、ここでご飯を食べたり、子どもたちが庭とここを自由に行き来して遊んだりしています。
美奈さん：2 階は子ども部屋と寝室の間に縁台と本棚があって、ちょっとした読書スペースになっています。そこからは近くの山が見えて、1 階とはまた違った開放感のある空間になっています。

家が住む人を助け、住む人が家を成熟させる

鈴木さん：実は私たちは「外の間」のある家の設計を依頼されましたが、ほとんど「箱」のような、未完成な状態で家を引き渡しました。引渡しの際に躯体工事は終わっていましたが、扉や水まわり、キッチンなどの設備は全く付けませんでした。壁もプラスターボードのままでしたし。その辺りの工事は、全てご自身で施工されたんです。
編集部：お二人とも建築系のお仕事をされているのでしょうか？
鈴木さん：建築ではないのですが、奥さまは壊れたと言って捨てられてしまうような家具や道具を利用したものづくりをしている方ですし、旦那さんも実家が鉄工所を営んでいたこともあって鉄を使った造作ができます。この家の主は、「自分たちが欲しいと思ったものがなければ作ればいい。」と言って、実際に作れる人たちなんです。
美奈さん：そういう方たちなので、自分たちの家についても、古い家を改修して住もうと考えていたようですが、旦那さんのお祖父様からこの久山町の畑地を譲り受けられることになって、新居の設計を私たちに依頼されてきました。
編集部：やはり「外の間」に魅力を感じて、依頼されてきたのでしょうか。
鈴木さん：そうですね。「自然とともに生きていけるような家にしたい。」という要望を受けて、この家の設計に望みました。
実際に庭と家が一体となった暮らしをされていると思います。

人生を充実させる、基盤としての住まいを

鈴木さん：私たちのお施主さんの多くは、建てた家を住む場としてだけでなく、生業の場にしようとする人が多いんです。
例えばこの久山の家では、奥さまは私たちと一緒に家づくりをしていた頃から「いつかカフェをしたい」と言っていた夢を実現しています。敷地内にカフェを開設しました。私たちはカフェの設計に関わってはいませんが、お施主さんが自分たちでプランニングして、躯体工事は地元の工務店にお願いし、それ以外は自分たちで施工したようです。
美奈さん：お店はランチもデザートも美味しいし、内装はおしゃれだし、昼時には混んで入れないくらいの人気店になりました。
鈴木さん：他にも、カレーとコーヒーを出す店を自分たちの家でやりたいと言って、目玉となるようなカレー作りを学びに、会社員の旦那さんが仕事をやめてカレーの本場に旅立ってしまったという方もいます。
編集部：すごい行動力ですね。
鈴木さん：家は人生の基盤です。建ててしまえば、それが財産になるし、家を中心に新しい人生を考えることもできる。その新しい人生を考えるときに、家を「生業の場」として考えると可能性が広がる。家が「生業の場」として機能していれば、子どもが成長して出て行っても、いつか地元に帰ってきてその生業を継いで生活していくこともできるんです。
そんな素敵な連鎖が「外の間」のある家づくりを通して、広がっていったらいいと願っています。（終）

■久山の家の「外の間」